

幼児に発生した心因性盲の一例

芦谷博布 島田久一郎 堀籠昭次
ASHIYA-HIRONOBU SHIMADA-KYŪITIRŌ HORIGOME-SHŌJI

弘前大学医学部精神医学教室(主任 和田豊治教授)

(9. IV. 1957 受附)

心因性盲すなわちヒステリー性黒内障の発生は稀ではないが、本報告のような3才の幼児にみられた報告は甚だ稀であり、本邦に於ては、小口が3才4ヶ月の男児の1例を大正14年に報告している以外には文献的にも見当たらないようである。

症 例

患者：3才8ヶ月の男児。

家族歴：父35才，母34才，共に健。同胞は1名(6才)で健常，他に早産死亡の2人がある。神経病・精神病の遺伝的負荷は全くない。

本人歴：胎生期及び出産時に異常なく，成長・発育も順調。生齒8ヶ月，処女歩行1年2ヶ月。現在迄に特記すべき疾病はない。性質は明朗・活発・勝気で，何でも自分が先にされないのがすまない，という一面がある。

発病以来の症状及び経過：昭和31年10月30日午後1時半頃小型トラックが静かにバックしたのに触れて転倒，後車輪の間を通過して前車輪のところで“痛い”と泣いていた。直ちに北秋病院に運ばれた。

同院外科の初診時所見は次のようである。すなわち意識は明瞭であるが，眼は閉じており，“腹が痛い”と泣き叫び，“何処が痛い”と聞くと臍部辺りを指示する。しかし腹部外傷はみられず，僅かに後頭部に一ヶ所，示指頭大の擦過傷跡がみられた。なお経過をみているうちに，3時間目に嘔吐があり，昼に食べたと思われる内容物に混じて，少量のコーヒー残渣状物が吐き出された。そこで胃乃至腸管損

傷の疑のもとで，同日午後5時頃から手術を行った。すなわち正中切開により，約150ccの血性液を排除したが，腸管には全く異常なく，患者が痛みを訴えた部位には蛔虫一匹が認められたに過ぎない。

当夜は“水が飲みたい”と繰り返しがみ，不機嫌であり，殆んど就眠しなかった。翌31日朝6時頃，全身の強直性・間代性の痙攣発作があり，一過性の意識喪失をみた。その2時間後にも同様の発作が起り，ついで2回軽い痙攣が見られた。夜迄にクロールプロマジン⁶を数回与えた結果，概ね入眠状態を続けた。クロールプロマジンはその後も続け，11月3日に至って注射を止めたが，その日から“暗い”と訴えるようになり，玩具等を眼前に示しても，あらぬ方に手を伸べるようになった。

同月5日に腰椎穿刺を行ったが正常。また7日の眼底検査でも異常なく，明暗の弁別は可能な様子であったという。9日に抜糸，10日に同院を退院，同月12日に新潟大学病院眼科を訪れ，著変がないと云われた。その後，家庭で指示通り栄養に留意して来たが，視力の回復はみられなかった。そこで，同月22日に本学眼科を受診，しかし眼科的に失明の原因となるべき所見がなかったので，翌々24日当科外来に頼診，心因性盲の診断のもとに26日に当科に入院した。

なお事故以来，患者には尿意頻数があり，日中は5分間に2〜3回にも及ぶ。夜間就寝中は4時間に1回位であるが，しかし失禁することはない。また音に対しては極めて敏感に

なり、友達の遊ぶ声を耳にしては、一人でヤキモキする様子が観察されたという。

入院時所見並びにその後の経過：体格中等，栄養失調状態で畸形はない。腹部白線に沿って手術痕がある。心・肺に異常なく，瞳孔左右略々同大，正円形で，対光反応も正常。四肢の運動機能に異常なく，病的反射も認められない。尿所見・血液及び脳脊髄液所見いずれも正常。頭蓋レ線写真にも骨折その他の異常所見を欠く。脳波所見にも著変がない。

精神的には概して不安・不機嫌な状態にあり，診療に対して甚だしく脅威的・拒否的である。視線は定まらないが，故意に視線を逸らしているという印象は受けない。入院当初は病室のベットに屢々衝突したり，また手探りで玩具を弄び，食事は母親に食べさせて貰っていた。

入院後は精神的接触を密にすることに極力努め，また5病日から17病日まで1日量0.05gのイソミタルの経口投与を行った。不安・不機嫌な状態は日一日と消退して行き，医師にたわむれるようになった。それと同時に尿意頻度も次第に軽快して，1週後には1時間に2～3回，2週後には1回以内，3週後には日中3～4回と常態に復した。顔貌も尿意面の軽快と併行的に改善され，3週目を過ぎる頃には略々自然的になった。第10病日頃から物に衝突することが少くなり，食事手探りするようではあるが，次第に一人でとり，その範囲を拡大して来た。しかし室外に一人置かれると，不安な表情を見せて動こうとしなかった。それが3週頃になると，廊下を一人でそろそろと慎重に歩くようになった。それでも2m位歩くと立止って母を呼び，それ以上歩こうとしない状態であった。そのほか，たとえば突然「雪が降っている」と云うようなことも，時々その頃に認められた。このように或る程度見えて来たとは思われたが，それが純視力面にどの程度であるかの確証が得られないまゝに時が流れた。

12月10日の筋注による Isomytal-interview

は失敗に帰したが，同月25日にイソミタル0.05gを頓用せしめた時は比較的よく反応して，大体正常な視力に復していることが確かめられた。すなわち絵本や玩具等を利用して誘導を試みたわけであるが，極く微小に描かれたトンボも識別していることが判明した。

しかし精神状態の改善は尙依然としてはかばかしくなく，1月に入ってから新らしい動作に移る時は非常に慎重・用心深い態度がみられ，しかし慣れて来ると活発になる傾向がみられた。一般に拒絶症の態度が相も変らず著明で，それが前景に出ていた。ところが1月12日に低電圧通電(20V・5秒)を行ったのであるが，その時を境にして上述のような態度が一変し，素直に“見える”という言葉で応ずるようになった。そして付添った母親の「病前の状態に完全に復した」という言のまゝ1月14日退院した。

なお入院中は再三眼科的に精査を行ったが，眼底その他に異常所見は全く認められなかった。

考 按

本例が外傷を契機として，心因性に発した盲であることは，上述した所見や経過等から推して略々明白であろう。視力障害を裏づける器質的基礎が認められず，瞳孔にも全く異常がないし，更に尿意頻数や高度の拒絶症的傾向などと云った神経症的症候を併せ有すること，そしてそれ等の神経症的症候の改善と併行して視力障害も回復したこと等はその証左となるであろう。しかし発病の契機となった外傷が，トラックに触れたことにあるのか，開腹術という手術的侵襲によるのか，或いはまた縦起的に生じた両者の重合にあるのかは，年少なために体験の追想が得られず，したがって明らかになし得ないところである。しかしたとえいすれであるにせよ，それらは精神的に激しいショックを与える事態であることは論をまたない。ヒステリー反応としての黒内障の発現機序については異論もある

が、たとえば限局性の擬死反射なる概念を KRETSCHMER⁸⁾は想定している。本例はそのような概念のもとでもよく理解し得る症例のように思われる。しかも患者は3才という年少者であり、精神的ショックの影響が長く残存し、且つ視力障碍及び尿意頻数に限局・固定した症候をもたらすに至ったとみるべきであろう。もちろんそれらの問題に対しては精神分析的立場からの解明も決して不可能ではないが、それは割愛する。

一般にヒステリー性黒内障の経過は2週間以内のことが多い^{1)~5)}。その点では本例の経過は稍長い。このことについては種々の理由もあげられるであろうが、それにしても早期発見と適切な治療が行われなかったことが大きな要因であることは否めまい。

尙本例において、低電圧通電ショックが顕著な精神・身体面の改善をもたらしたことは興味あることと云わなければならないし、この点では本例は単純な反応としての小児ヒステリーの圈内に入るものと云い得るであろう。

結 語

3才8ヶ月の男児の、外傷後に発生したヒス

テリー性黒内障の一例について症例報告をした。患者には頻尿も伴っていたが、その改善と視力の恢復とは略々併行的であった。麻酔分析で視覚の存在が或る程度まで確かめられたので、その後は精神的接触に努めた。そして最後に低電圧ショック療法を行って完治せしめ得た。

(本論文の要旨は第27回弘前医学会例会に於いて述べた。)

文 献

- 1) 弓削経一：臨眼，昭25，4，491.
- 2) 小川・福原：眼臨，⁴²29，48，631.
- 3) 下田重正：同誌，昭25，44，234.
- 4) 坂本善晴：眼紀，昭29，5，389.
- 5) 山田 泰：同誌，昭26，2，282.
- 6) 小口忠太：愛知医学会誌，大14，32.
- 7) 丸井清泰：輓近神経症学，克誠堂，昭13.
- 8) KRETSCHMER, E.: Hysterie, Reflex und Instinct. 1948. (吉益譯，ヒステリーの心理，みすず書房，昭28.)